

自己学習力の育成を目指す学習システムの工夫

—学習意欲を引き出す学習システムと家庭学習の定着を目指して—

平成 23 年度 文部科学省指定
「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究」

平成 21・22・23 年度 尼崎市教育委員会指定
「特色ある教育活動推進事業」



平成 23 年 11 月 15 日 (火)
尼崎市立若草中学校

目 次

○ はじめに	1
I 実践研究の概要	2
1 研究テーマ	
2 テーマ設定の理由	
(1) 本校教育目標から	
(2) 本校生徒の実態から	
(3) 教育の今日的課題から	
3 研究組織	3
4 実践研究の構図	
5 研究の経過	4
II 実践研究の実際	5
1 形成的評価（振り返りと見通し）について	
(1) 単元確認テスト・自己チェックシートの取り組み	
(2) 再テスト・放課後補充学習の取り組み	
2 家庭学習の定着のための取り組み	7
(1) 宿題予定表の取り組み	
(2) テスト学習計画実行表の取り組み	
(3) 自主学習ノートの取り組み	
3 その他の重点取り組み	10
(1) 放課後チャレンジスクール(放課後学習)での取り組み	
(2) 授業規律の徹底	
(3) 研究授業の実施	
(4) 校内研修の取り組み	
(5) 自己向上支援検査(SET)の実施	
(6) 小中連携の取り組み	
(7) 進路学習ノートの取り組み	
III 成果と課題	14
1 実践研究の成果	
2 今後の課題	
○ おわりに	18

はじめに

新学習指導要領の全面実施がスタートするにあたり、言語活動の充実など知識・技能の習得だけでなく、それを活用した思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視した教育が求められています。各学校におかれましても、それぞれの課題を見据えた、研修や研究を推し進められていることと存じます。

本校では平成 21 年度から尼崎市教育委員会による「特色ある教育活動推進事業」さらに平成 23 年度文部科学省による「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究」の指定を受けて、3 年にわたり関係各位のご指導をいただきながら実践に取り組み、研究を進めてまいりました。研究テーマを「自己学習力の育成を目指す学習システムの工夫」、サブテーマを「学習意欲を引き出す学習システムと家庭学習の定着を目指して」と設定し、「生きる力」に結びつける「確かな学力」の前提である「学ぶ態度・意欲」に重点を置き、特に学習が苦手な生徒の学力向上に、学校として組織的、計画的、段階的に取り組んでまいりました。

特に、われわれ学校が『確かな学力』を身につけていくための素地をしっかりと築きあげていくことを目指して、小規模校の限られた教職員数のなかでできること、また、様々な状況で育つ生徒たちに現状でできることはなにかを日々、追究してまいりました。

研究を進める中で、現在は経年の結果比較や各種調査の分析をしながら、本校の実態に即したシステム作りに変化させつつ、新たな方策や方向性を模索している状況といえます。とはいえ、なかなか結果としての向上に結びつかず、いい報告ばかりお伝えできない点もありますが、学校全体として卒業までの 3 年間の見通しを持って、粘り強く取り組んでいるところです。

今後は、研究発表のためだけの取り組みにならぬよう、本校が抱える課題解決に向けて学校として組織的に取り組み、さまざまな角度から生徒たちの力を伸ばす効果あるシステム作りを目指して改善を図っていきたいと考えます。

ささやかではありますが、ここに研究の一端を公開し、皆様方に本校の取組についてご助言を賜り、今後の教育活動に活かしていきたいと考えています。

最後になりましたが、これまで丁寧にご指導、ご助言を賜りました各先生方、また研究の機会をあたえていただいた尼崎市教育委員会に深く感謝申し上げます。

平成 23 年 11 月吉日

尼崎市立若草中学校

校長 佐藤 喜代子

I 実践研究の概要

1 研究テーマ

自己学習力の育成を目指す学習システムの工夫
～学習意欲を引き出す学習システムと家庭学習の定着を目指して～

2 テーマ設定の理由

(1) 本校教育目標から

本校の目指す生徒像は、

- 一、自ら進んでねばり強く活動する生徒（意）
- 一、目的を持って意欲的に学習に取り組む生徒（知）
- 一、豊かな心と思いやりを持つ生徒（徳）
- 一、心身ともに健康な生徒（体）

である。教育目標の具現化を図るためには、まず「意欲」を引き出すこと、次に「学習への意識」を持たせること、さらに「学習に関しての達成感」を味わわせることが重要と考える。そこで、「自己学習する力」を育む実践研究を進める必要があると考えた。

(2) 本校生徒の実態から

本校は、生徒数 323 名 12 学級の小規模校である。地域には、大きな商店街があり、地域で子どもを健全に育てようという気運がある。ただ、生活面でのしつけは比較的しっかりとできてはいるものの、就学援助率は 40% 近いことからわかるように経済的基盤等には幾つかの課題を抱えている。授業参観の保護者の参加は比較的少ないが、体育大会・文化発表会・クラブの大会などの参加者は多い。行事や生徒指導・部活指導に関して、学校教育への信頼は厚く、授業や学習面では学校に依存している傾向が見られる。部活動への入部率も全体で 8 割を超え、学校はここ 10 年以上落ち着いた状況が保たれている。したがって、保護者からのクレームが非常に少なく、子どもたちの多くはおとなしくて素直である。また、生徒指導にかかる大きなトラブルは少なく、いじめや仲間はずれもほとんどない。しかし、従順に指示通りは動けるものの、自分から進んで活動することや、一部から全体を考えることや、先を予測して行動することに課題がある。教科の基礎基本の習得も大切であるが、思考力・判断力・表現力を鍛えて、生きる力をつけるための学力を育てていくことが大切だと考える。

生徒の学習面に関する実態のわかる調査結果を以下に掲げる。

【平成 23 年度尼崎市学力・生活実態調査より】2 年生の学習状況

● 学校に持っていくものを前日に確かめる	56.5% (市平均 67.8%)
● 自分専用の携帯電話を持っている生徒	62.8% (市平均 63.7%)
● 普段（平日）の家庭での学習時間が 30 分以下である（塾も含む）	53.9% (市平均 32.6%)
● 学校の宿題をしている	78.2% (市平均 79.7%)
● 苦手な教科の勉強をしている	48.5% (市平均 69.0%)
● テストで間違えたところをあとで勉強している	21.8% (市平均 52.6%)
● 普段（平日）、読書を全くしない生徒	39.7% (市平均 50.0%)
● 授業中に私語をしている	66.7% (市平均 49.5%)
● 学校は落ち着いて勉強できる雰囲気である	50.0% (市平均 61.0%)

全学年に共通して上記データと同じ傾向が毎年見られる。特に、「家庭学習の少なさ」と「学習へのあきらめ感」は大きな課題である。部活動や行事には割に自主的に努力できる生徒が、教室で受動的に授業を受けている姿を見ることは少なくない。

したがって、この状況を改善するためには、「学習に対しての意欲」や「学習への意識・態度」を身につけるための効果的な手立てが必要である。個々の教員の授業改善のための自主的な努力も大切であるが、学級・学年を越えて「学校」としての明確なシステムを、共通理解のもとで地道に実践していくことが有効な方法だと考える。

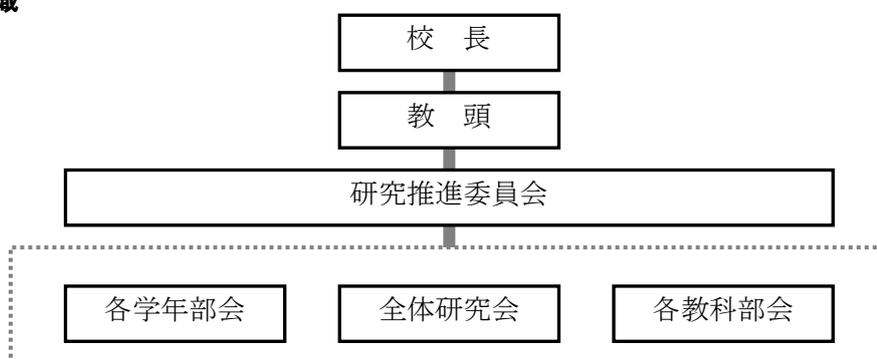
(3) 教育の今日的課題から

文部科学省の提起する「生きる力」は、新学習指導要領においてもさらに受け継がれている。その「生きる力」の中の「確かな学力」を我々は「基礎基本」「思考力・判断力・表現力」「学ぶ意欲・態度」の大きな3つの土台から成り立っているととらえ、その中の一番の基礎となるものは、「学ぶ意欲・態度」だと考えた。本校の生徒の実態を考えると、「学ぶ意欲・態度」は、基礎基本を習得し、その知識・技能を活用する力をはぐくむための前提ともなるべきものといえる。

そこで、全ての教科担当が、一つの単元が終わるたびに、教科内容面だけでなく、学習への意識・態度を振り返り、次への見通しにつながる取り組みを進めることとした。こまめに「形成的評価」を実施することで、生徒の達成感を導き出し、次の単元への意欲につなげたいと考える。

また、家庭学習においても、単に教科ごとに教科担任の裁量で宿題を出すのではなく、教科間の連携を密にするとともに、保護者にも協力が可能な形での、組織的・計画的な家庭学習の促進システムを作り上げたい。

3 研究組織



4 実践研究の構図



5 研究の経過

		平成21年度	平成22年度	平成23年度	
研究テーマ	1 学校研究テーマ	「生きる力と豊かな心を育てる教育活動」	「言語活動を取り入れた授業へのアプローチ」	「豊かな言語活動を基盤とした授業づくりと自治活動の推進」	
	2 本事業テーマ	「自己学習力の育成を目指す学習システムの工夫」			
実践内容	振り返りと見直し	1 単元確認テスト	5教科による単元終了後の小テスト実施		
			4教科は、単元終了後の実技(作品)テスト		
		2 自己チェックシート	9教科による単元終了後の自己評価表		
	3 再テスト・補充学習	一部の教科で適宜実施(教科担任裁量)			
		学年ごとに4週間試行実施	放課後チャレンジスクール (尼崎市教育委員会学力向上クリエイト事業支援3)	放課後チャレンジスクールの強化充実	
	家庭学習	4 家庭学習	宿題予定表	テスト学習計画実行表	
			家庭学習強化週間(年2回)	(定期考査2週間前)に変更し継続	
			自主学習ノート(学年裁量)	学年裁量で実施	全学年実施
	学習活動の基盤	5 生徒指導	授業規律の徹底(全教室に掲示)		
			チャイム着席指導(教員がチャイム前移動)		
6 学級作り		いじめのない学級作り			
		行事での集団作り(達成感・自己肯定感)			
			自己向上支援検査の分析による個人指導		
7 研究授業推進		教員全員が年1回公開授業を行う	学期1回の研究授業と研究協議の実施 (1教科1名+全クラス1時間)	研究発表に向けての 全学年でチームを組んでの研究	
		校内公開授業週間の設定			
8 校内研修		本校学習実態分析の校内研究会(3回)	年3回	年3回	
		学習指導に関する教育講演会(年1回)	年2回	年2回	
9 小中連携		クラブ体験・生徒会紹介			
		授業見学			
		夏季合同研修会			
		高校との情報交換(英)	未定		
実態把握	1 アンケート				
	生徒アンケート(7月・12月)		12月	11月	
	保護者アンケート(7月・12月)		12月	12月	
	教師アンケート(1月)		1月	1月	
	2 実態調査				
	尼崎市学力生活実態調査(5月)		5月	5月	
	全国学力・学習状況調査(4月)		4月	今年度中止	
		自己向上支援検査(6月)			

II 実践研究の実際

「自己学習力」をはぐくむためには、毎日の各授業の中ではぐくむ部分と、毎日の家庭学習ではぐくむ部分の両面で研究していくことにした。

そこで、次の2つの目標を設定した。

- (1) 生徒自身が学習することの目的と方向性を理解し、学習を通じて成就感・達成感を味わわせるとともに、単元ごとに振り返りと見通しを持たせる「形成的評価」により、学ぼうとする意欲を向上させ、学ぶ態度を育成する。
- (2) 家庭学習の意味・意義を生徒に理解浸透させ、教科間での連携を重視しつつ、計画的・組織的に家庭学習を課題として与え、適正に点検しつつ指導・支援していく。また、保護者にも計画的に啓発し、家庭での学習習慣の定着の手立てを具体的に示し、家庭と連携したシステムの中で、生徒の自己学習力を育成する。

この目標を達成する手段として、以下のような実践を手がけた。各実践を学期ごと、年度ごとに検証し、成果と課題を全職員で共通理解しながら深めている。

1 形成的評価(振り返りと見通し)について

(1) 単元確認テスト・自己チェックシートの取り組み

平成21年度より全教員で「単元確認テスト」を実施する。数学・英語などの教科については、教科単位でこれまでも実施しており、基礎基本の習得に関しては大きな成果を上げていた。単元確認テストや放課後補習を実施した場合、尼崎市や全国の学力調査の本校の結果がかなり全国平均に近づいた例もある。

国語・社会・数学・理科・英語の5教科については「小テスト」の形で単元終了後に必ず実施するようにした。音楽・美術・保健体育・技術家庭科の4教科については「実技試験」や「作品提出」で評価した。

一方で、この確認テストを「振り返り」や「見通し」のための具体的な材料にできるように、単元が終わるごとに「自己チェックシート」に自己評価を記入させた。研究部が一応の型(フォーマット)を示し、それに各教科担任が工夫を加え、5教科を中心に全教科で各単元終了の時間に書かせて提出させた。

範囲が1~2ヶ月の期間のテスト勉強はあきらめてしまう生徒が「2週間ほどの範囲の単元確認テストならテスト勉強ができる」という数が増えたことが成果としてあげられる。

しかし一方で、本来ならば「自己チェックシート」でしっかり振り返ることが「単元確認テスト」への意欲付けや、次の単元への見通しにつながるのであるが、授業の中ではなかなか「自己チェックシート」を記入する時間がとれないため、一部の教科でしか実施できないという反省を活かし、平成23年度は、考査日の最後に自己チェックを実施し、振り返りが確実にできるようにした。

(2) 再テスト・放課後補充学習の取り組み

平成22年度までの取り組みとして、「単元確認テスト」の反省として、2週間ほどの範囲でもその範囲の復習のできない生徒が多数いるため、4週間の期間限定で、「単元確認テスト」への意識の弱い生徒対策として「再テスト」と「放課後補充学習」を試行実施した。

学年ごとに毎週金曜日に、その週の「単元確認テスト」で不合格であった生徒を残した。2教科ずつの実施とし、不合格者を対象として「再テスト」(ほぼ同じ問題)を実施し、更に不合格の生徒を残し、約1時間の放課後補充学習を行った。中位層の生徒の意識が高まり、効果が見られたが、再テストが何教科も重なる低位層の生徒にとっては負担が大きく、意欲低下も見られた。また、部活動への影響も否めないため平成23年度は再テストや放課後補充学習は各教科での取り組みに任せている。

チェックシートの例

国語科での振り返り作文

単元名 壁に残された伝言

題名 「あの日」が伝わっていく無限の連鎖は今も続いている。

2年 2組 19番 名前

い
の
で
は
、
だ
い
か
と
思
い
ま
し
た。

ん	い	こ	は	の	原	つ	=	屏	無
で	る	の	、	人	爆	ア	か	の	限
行	ん	気	戦	々	を	、	で	こ	の
く	い	持	争	は	落	ど	、	と	連
人	ち	は	、	さ	ニ	ニ	で	鎖	
か	だ	を	い	そ	水	か	の	は	と
ら	い	世	け	れ	て	で	世	は	は
の	か	界	な	を	、	か	の	い	
伝	な	の	い	テ	そ	な	中	の	私
言	、	と	人	と	し	う	し	で	か
、	と	ん	知	じ	ゆ	ん	戦	と	思
思	思	に	、	や	う	で	争	思	う
い	い	伝	マ	本	ニ	(も	い	に
を	ま	え	い	で	と	る	し	ま	、
筆	す	た	、	知	を	、	て	し	終
書	。	い	か	、	味	日	い	た	わ
は	戦	と	ら	く	わ	本	る		ら
伝	争	思	筆	今	い	は	国	今	た
え	で	、	者	の	、	一	が	も	い
た	死	こ	は	人	今	度	あ	ど	戦

社会科でのチェックシート

1年生 社会 授業チェック (1)組 名前 ()

◎第1章 私たちが住む地球を振り返ろう (Oをつけよう)

- ・三大洋と六大大陸は覚ええましたか?? (かんべき もう少し ダメ)
- ・経度と緯度は理解できましたか?? (かんべき もう少し ダメ)
- ・時差の計算はできるようになりましたか?? (かんべき もう少し ダメ)

◎中学生の社会を受けてみてどうですか。感想

時差の計算がちょっとむづかしい。

◎こうしてほしい!!! など要望などを教えてください。

時差に関するミニテストを出してほしい。

1年生 社会 授業チェック (2)組 名前 ()

◎第1章 私たちが住む地球を振り返ろう (Oをつけよう)

- ・三大洋と六大大陸は覚ええましたか?? (かんべき もう少し ダメ)
- ・経度と緯度は理解できましたか?? (かんべき もう少し ダメ)
- ・時差の計算はできるようになりましたか?? (かんべき もう少し ダメ)

◎中学生の社会を受けてみてどうですか。感想

めっちゃ楽しいし分かりやすい!

でも六大大陸がおぼえろへん...

◎こうしてほしい!!! など要望などを教えてください。

宿題少なめに!!(笑)

理科での見通しと振り返り

Date

単元 生物のつながり

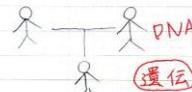
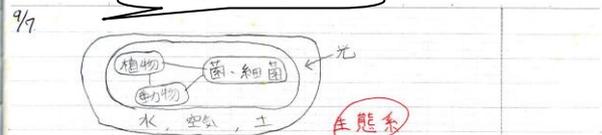
9/7(水)	食物連鎖 (25野下 P.98)	A
9/8(木)	生態系での役割分担 (P.101)	B
9/13(水)	生態系での物質循環 (P.101)	A
9/15(木)	遺伝のしくみ (P.92)	A
9/16(金)	生殖 (P.96)	B
9/20(火)	遺伝の法則 (PSD) (P.98)	A
9/22(木)	遺伝の法則を使って (9-7P.93~97)	A

単元の見通し

振り返りの理解度

授業部分

授業部分

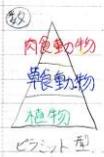


食物連鎖 (food chain)

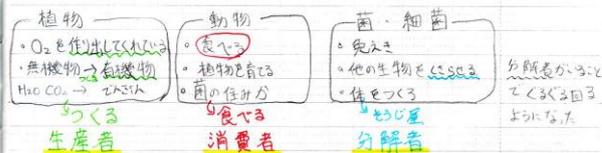
× 食う・食われるの関係



植物 穀が多い 絶妙なバランス 動物 少ない 心が受器



生態系での役割分担

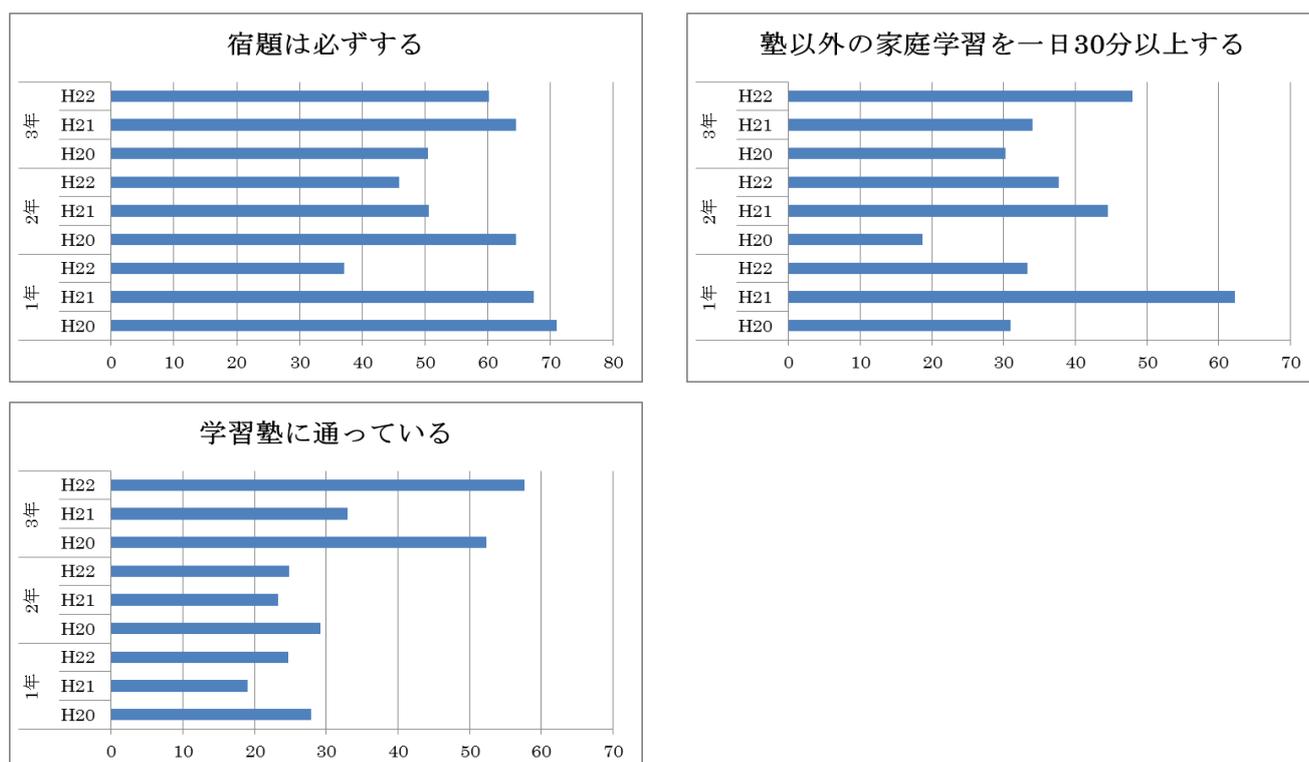


2 家庭学習の定着のための取り組み

「家庭学習」に関しては、次のような実態がある。

学 年	1 年			2 年			3 年		
実 施 年 度	H20	H21	H22	H20	H21	H22	H20	H21	H22
宿題は必ずする	71.0	67.4	37.2	64.6	50.6	45.9	50.5	64.5	60.2
塾以外の家庭学習を一日30分以上する	31.0	62.3	33.3	18.7	44.6	37.7	30.2	34.0	48.0
学習塾に通っている	27.9	19.0	24.7	29.2	23.3	24.8	52.4	33.0	57.7

※ 平成 20～22 年実施の生徒の学校評価アンケート結果より(数字は%)



「家庭学習」については、大幅に時間が少なく、家庭学習への意識は低いと言わざるをえない。学習塾との関連をみると、1・2年の時は2割から3割、3年になって半数以上が通塾しているが、7割から8割の生徒が「学習塾」以外の家庭学習をほとんどしていない実態がうかがえる。

「宿題」については、学年の取り組みや各教科担任によってもいくらかの違いはあり「必ずする生徒」が4割から6割と差がみられるが、家庭学習ではなく学校の休み時間などに済ませてしまう傾向があり、数字は「宿題への義務意識」ととらえたい。

「宿題」については各教科担任の、また「家庭学習」については各学年の、定着に向けてのさまざまな工夫した取り組みがなされてはいる。ここでは、学校として全職員で実施した取り組みを報告する。

(1) 宿題予定表の取り組み

平成 21 年度は 1 学期と 3 学期に、平成 22 年度は 1 学期に、1 週間ずつ「家庭学習強化週間」と銘打ち、各学年ごとに「宿題予定表」を配布した。必ず保護者に渡すよう指導し、保護者も翌週の何曜日にどの教科がどのような宿題を出す予定かが分かるようにした。

ねらいは、つぎの 2 点である。

- ① 各学年・各教科で宿題の量を調整し、一日に平均した適切な課題を与えることで、何もしない日を作らず、かつ、達成可能な課題にして学習意欲を高める。
- ② 保護者も「今日の宿題」が分かっているので、課題が分からないまま「勉強しなさい」とあいまいな注意を促すのではなく、宿題の確認を通して家庭学習への温かい声かけにつなげることで、家庭での学習する雰囲気築く。

その結果、保護者にもわかりやすい家庭学習の取り組みではあったが、生徒の個々の能力に応じた課題になるためには、統一したものより到達目標がはっきりしたものの方が取り組みやすいと考えた。その結果、宿題予定表がほぼテスト前の時期と重なる部分が多いことから、より効果の期待できるテストに向けて取り組む家庭学習の増加につなげるために、平成23年度は(2)の取り組みに一本化して実践することとした。

(2) テスト学習計画実行表の取り組み

平成22年度の2学期から、「宿題予定表」を「テスト前計画表」と併せた実施を試みた。毎日の「宿題」から「単元確認テスト」、「単元確認テスト」から「定期テスト」へと向かう系統性を意識させた方が「家庭学習」の意義の理解につながり、意欲が高まるのではないかと考えた。

「テスト学習計画実行表」として、テスト2週間前に配布し、

①テスト範囲 ②テスト勉強の課題 ③課題の提出日 ④テスト勉強のためのアドバイスの4項目を示し、宿題とテスト勉強を併せて、自身で計画し、実行の結果を評価し、最後に家の人からの評価をもらい提出する形にした。

宿題予定表

宿題徹底週間へのご協力をお願い

梅雨明けも間近に迫り、初夏のきざしが感じられる今日この頃です。保護者の皆様にはますますご健勝のことと存じます。また、平素は、本校教育活動へのご理解・ご支援ありがとうございます。

さて、このたび「宿題徹底週間」を実施いたします。11日から始まる三者懇談会では、学級担任と今学期のまとめをしていただきますが、その前にまずご家庭でお子様の「家庭学習」に対する意識を確認していただきたく存じます。

つきましては、下記のように各クラスの宿題日(宿題を必ず出す授業)を設定いたしますので、チェックや確認・励ましなどのご協力をよろしくお願いいたします。なお、その結果に関しましては、期末懇談会で担任のほうから確認させていただきます。

記

1 期間 平成20年7月7日(月)～10日(木)
2 宿題日 (時間割) 1-1 1-2

	月	火	水	木
1	学活	音楽	数学	国語
2	社会	CT	国語	英語
3	保体	国語	理科	社会
4	美術	非行防止授業	英語	理科
5	国語	英語	社会	保体
6	理科	数学		道徳

テスト学習計画実行表

日付	学習計画		実際にやった家庭学習		星取表	
	科目	学習内容	科目	学習内容		
11/8	全	備考	全	備考	勝敗 ● 時間 -0.5	
19	全	備考	全	備考	勝敗 ○ 時間 +0	
10	全	備考	全	備考	勝敗 ○ 時間 +1	
21	全	備考	全	備考	勝敗 ○ 時間	
22	全	備考	全	備考	勝敗 ● 時間 -1	
23	全	備考	全	備考	勝敗 ● 時間 -1	
24	理	英語	理	英語	勝敗 ○ 時間 +1	
25	社	英語	社	英語	勝敗 ○ 時間 +1	
26	英	英語	英	英語	勝敗 ○ 時間 +0	
反省	テスト直前に一夜付けしたのでも、(余裕)をもってテスト ふたりにしてはよりよかったです。○ 予定より多く学習したとき...○ 予定より少なかったとき...●				さて結果は 3勝3敗 4勝を	
記入例	1日(月)	国数社 漢字学習 方程式の練習問題 ワーク p15~17	2.5	国社 漢字学習 ワーク p15~17	2	勝敗 ● 時間 -0.5
	2日(火)	英理 単元確認2-3 プリント5	2	数英理 練習問題 単元確認2-3 プリント5-6	3.5 5.5	勝敗 ○ 時間 +1.5

一夜付けでもいいんだけど
すぐに忘れてしまうから
将来4倍立つのはコツコツ継続だから
下UP



中間テスト（10月中旬）と期末テスト（11月下旬）で、いずれも2週間前の学活で配布する形で実施したが、その成果は以下のとおりである。

（平成22年度の2学期実施アンケート結果）

アンケート項目	学校全体
テスト2週間前にテスト範囲が分かった方がいい。	87%
テスト2週間前から学習計画を立てることでテスト勉強する気になった。	53%
ノートやワークを期日通り提出しようと努力した。	78%
ノートやワークの提出日が示されることで遅れずに提出しやすくなった。	70%
実際にノートやワークを期日通り提出した。	64%
もっと詳しいテスト学習のアドバイスがある方がいい。	75%
次のテストは今回よりもっと準備して取り組みたいと思う。	85%

これまで、定期テストの1週間前に「テスト範囲」のついた「学習計画表」を配っていたのを、2週間前にすることで「家庭学習」と「テスト勉強」が延長線上にあることを意識させた。テスト範囲を早く知り、学習計画を練ること、また、勉強する中身を知り、アドバイスを提示することで、少なからず「勉強せねば」「実行したことを提出せねば」という自らに課す「意識」の向上につながっているのがわかる。

ただ、保護者に協力を得る形での家庭学習への取り組みには至っていないことから、実施への工夫等の必要があるのは確かである。

(3) 自主学習ノートの取り組み

「自主学習ノート」は、従来から学年によって実施に取り組んできている。そこで、研究推進委員会で、「自己学習力」の育成に効果があると考え、全校で取り組むことを提起し、学年の実態に応じて目的も方法も違うので、内容は学年裁量で実施している。市販のノートを使い、原則は明日の予定や持ち物を終学活時に記入し、その下に一日1ページ以上書き込んで朝学活で担任に提出する家庭学習ノートのことである。しかし、学年によって、学習だけでなく「日記」のように自分の思いをかけるようにして、まず「記述」を学ばせ、家庭学習と提出の習慣化に重点を置く学年や、その中身の充実を力を入れている学年がある。また、自分の学習課題にあわせて学習した中身だけを記入してもよい状態にし、5教科の自主学習プリントの課題と併せて行う学年があったりと、学年の裁量に任せているのが現状である。より効果的なものにするためには、さらに実践を重ね研究していく必要がある。

自主学習ノート

英語科の取り組み

授業部分

1 休
2 社 同
3 理 同
4 英 30分予習、実験、分子 理科室
5 英 1つだけあり

①大和と大商人を中心に、16世紀後半から17世紀初期に栄えた、豪華な文化を何というか。
A 桃山文化

②徳川幕府を築き、お上り文化、この時代の豪放な風潮をあらわしたのが何か。
A 狩野永徳

③16世紀中ごろからはじまり、スペインやポルトガルとの貿易を何というか。
A 南蛮貿易

④織田信長・豊臣秀吉につかえ、茶道を完成させた堺の商人は誰か。
A 千利休

⑤大社修理のため各地で歌や踊りを興行し、のちに京都でかぶき踊りをはじめた出雲大社の巫女は誰か。
A 出雲の阿国

～江戸幕府の成立と鎖国～

①1600年に、徳川家康のひさる軍と石田三成のひさる西軍に分かれて争った戦いは何か。
A 関原の戦い

②1603年に征夷大将軍になり、江戸幕府を開いた人物は誰か。
A 徳川家康

③関原の戦いより前から徳川氏に仕がっていた大老を何というか。
A 譜代大老

1つだけ覚えていきましよう

P.41

The place I want to visit is Korea. My Korea
e-mail friend, Mina, lives in Seoul. e-mail
She writes to me about schools, movies Seoul
and music in Korea. I write to her about close
life in Japan. Korea is close to Japan. Samulnori
but I have never been there. So there are many things I want to do. For example, I want to visit Mina and go to a samulnori concert with her. It will be fun.

私が訪れたい場所は韓国です。私の電子メールの友だちの美那はソウルに住んでいます。彼女は私に、韓国の学校や映画や音楽のことについて書いてくれます。私は彼女に日本の生活のことを書きます。韓国は日本に近いです。まだ行ったことがありません。だから、やってみたいことがたくさんあります。例えば、美那と一緒に行きたいです。楽しいでしょうね。

予習部分

名詞+be動詞+名詞+動詞を置いて名詞を説明する文

the place I want to visit is Korea.

The place I want to visit is Korea.

名詞+be動詞+名詞+動詞を置いて名詞を説明する文

the place I want to visit is Korea.

名詞+be動詞+名詞+動詞を置いて名詞を説明する文

I want to visit France.

The place I want to visit is France.

The food I want to eat is sushi.

The thing I want to buy is a new car.

2) There are many things I want to do.

3 その他の重点取り組み

(1) 放課後チャレンジスクール（放課後学習）での取り組み

平成 22 年度は、尼崎市の「学力向上クリエイト事業」の一環として、希望する生徒に対して放課後チャレンジスクールとして実施した。平成 23 年度は基礎基本の習得を目標とし、学習支援を必要とする生徒を対象に実施している。教員を中心に保護者の了解を得て指名制で行い、教育経験者 1 名と 4 名の大学生で、個々の力にあわせた課題を与え、支援している。1 学期は数学を中心とし、1 学期の成績から判断して 1 年生は 2 学期からの実施としている。また、考査前は回数を増やし、希望者も参加できる形にしている。

平成 23 年 9 月現在

チャレンジスクールに来ている生徒の意識調査		はい(%)	いいえ(%)
1	教室とチャレンジスクールではチャレンジスクールの方がよくわかる。	80	20
2	プリント類等、自主学習をやる気になる。	60	40
3	チャレンジスクールの方が質問しやすい。	80	20
4	家でも苦手なことを少しずつやろうと思う。	50	50

1 学期から参加している 2・3 年生への意識調査の結果では、意欲を持ってきている生徒には効果が上がり、意識も向上しているが、そうでない生徒の中には否定的な見方しかなく、自己学習力の育成に結びついていない生徒もいる。しっかり面談等をして相互に理解を深め、意識を向上させる必要がある。

これからの課題として、「単元確認テスト」などを活用し、各授業と連携させれば、基礎基本の習得や学習意欲の向上に一定の効果が得られると推察できる。しかし、中位層の学習支援に役立てるようなものにしていくには現状では難しく、工夫が必要であると思われる。

また、低位層の生徒にも意識付けや人選など考えるべき点があるのも否めない。

(2) 授業規律の徹底

「学習時の態度」は「学ぶ意欲」の向上に欠かせないものである。内面からの意識の向上や意欲の喚起だけでなく、外面からも全職員の一一致した指導が必要である。

そこで、「授業規律 7 カ条」を「授業のマナー」として各教室に掲示し、授業前に必ず教員がそのことに触れて指導するようにした。本校の教員は、以前からも「チャイムと同時に授業開始」を合言葉に、始業のチャイムの鳴る前から教室に向かっている。チャイムが鳴り始めると同時に教員も自らが「授業規律」を守る姿勢を生徒は見ている。

授業のマナー
・ 授業前に学習の準備をしておく
・ チャイムが鳴る前に着席をする
・ 服装は整えておく
・ あいさつはしっかりする
・ 席では前を向き、姿勢を正す
・ 丁寧な言葉で話す
・ 私語は厳禁

(3) 研究授業の実施

授業力の向上は、生徒の学習への意欲を高めるためには必須事項である。

平成 21 年度は、年間で全教員が必ず一度指導案を作成したうえで公開授業することを義務づけた。しかし、実施を固定しなかったため、参観に行く教員の数が少なく、意識付けが不十分であった。また、授業に関するテーマが絞られていないことから授業者の課題意識が乏しかったり、評価シートを参観者が本人に渡す形で実施したために研究協議ができず、フィードバックが中途半端であった。そのため、各自の授業改善には課題があった。

平成 22 年度は、学期 1 回の研究授業日を設け、9 教科で各 1 名ずつが 3 回に分けて公開授業を行った。該当クラス以外は下校させ、学識者や授業改善アドバイザーを招き、授業後に研究協議や講演会を持った。10 名の教員の授業研究を行うことができ、また、周りの教員も研究協議に参加することで自らの授業を振り返ることができたことが、一歩前進であった。ただ、課題としては、一部のクラスでの授業は授業時数に入らないため、研究授業を行うためには授業時数の壁を乗り越えなければならない。

平成 23 年度は秋の研究発表会に向けての取り組みとし、学年や教科でのチームを組んで取り組む形で進めている。それぞれにやり方の問題点はあるが、それらを克服しても学校としての「授業改善」は重要であるので、さらに工夫した形で効果的な研究授業を推進していきたい。

(4) 校内研修の取り組み

平成 21 年度

- (ア) 関西地区を中心に「学力問題」に取り組んでおられる大阪府立大学准教授の西田芳正氏をアドバイザーとして招聘し、3 回に渡って校内研究会を行った。本事業テーマの「学習意欲の向上」や「低学力層の学力向上」を目標に、研究部の提案に対しての指導助言をいただいた。
- (イ) 学習態度や学習意欲に重点を置いた学力向上システムのあり方について、東京から篠田信司氏(元国立音楽大学教授・現 I L E C 言語教育文化研究所専務理事)を招いて 11 月に校内研修講演会を実施した。「授業改善と生徒指導」というテーマで、新学習指導要領移行期に私たちが今、生徒指導と学習指導において何をなすべきかの講演をいただいた。「学習意欲の持たせ方」に関する大きな示唆をいただいた。
- (ウ) 校内の研修以外に、1 学期に「単元確認テスト」の毎週実施や、年間通しての「宿題予定表」で、低学力層の学力向上に大きな成果をあげている「寝屋川市立第四中学校」に、教務主任と研究主任の 2 名を派遣した。先進校の取り組みについて小林光彦教務主任から指導助言をいただき、本研究会の取り組みの参考にさせていただいた。

平成 22 年度

- (エ) 平成 22 年度は、まず新学習指導要領の全面実施を念頭に置き、「言語活動を取り入れた授業へのアプローチ」という研究テーマを掲げた。そして、各学期 1 回の研究授業日を設け、授業クラス(3 学級)以外は生徒を下校させ、全教員が授業を参観し、助言者を招いての研究協議会を実施した。1 回目の研究授業日には、横浜国立大学付属教育デザインセンター研究員の三浦修一氏を講師にお招きし、「思考力・判断力・表現力の育成を図るカリキュラムマネジメント」のテーマで講演をいただき、「学習意欲」を高めるための授業改善について大きな示唆をいただいた。
- (オ) 3 学期に、兵庫教育大学大学院学校教育研究科の大野裕己准教授を指導助言者としてお招きし、「中間発表」に関する校内研究会を行った。特に、「家庭学習」の推進の取り組みに関して、3 つの課題改善のための提言をいただいた。
- i **子どもが意欲を持つ家庭学習の共通理解** → 各教科の連携・「習得」「活用」「探究」の宿題の組み合わせ・長期的なものとの短期的なものとの組合せ・子どものニーズ調査
 - ii **家庭学習と授業との関連づけ** → 「やって授業に役立った」という達成感・形成的評価としての点検重視・家庭学習の定例化や年間予定
 - iii **地域の力を借りて家庭を育てること** → 地域や保護者から学習支援をいただく機会づくり・的を絞った具体的な保護者アンケート・「少人数学習だより」などの発信

平成 23 年度

- (カ) 1 学期に兵庫教育大学大学院学校教育研究科の大野裕己准教授をお招きし、研究の進捗状況と今後の方向性についてお話をし、示唆をいただいた。
- (キ) 夏期休業中に大野裕己准教授を指導助言者としてお招きし、「研究発表に向けて」と題して校内研究会を行った。『生徒の学力保障の取り組みと家庭学習推進の効果的な結び方を考える』という内容で「育てたい子供の学力観を考える・幅広い力を育てるためにをポイントに、本校の取り組みや研究の検証をしていただき、これからの方向性について教えていただいた。

(5) 自己向上支援検査 (SET) の実施

平成 22 年度 6 月、平成 23 年度 6 月に「自己向上支援検査」(SET) を実施した。

「自己向上支援検査」は、学習面と社会生活面の両方から、各生徒(各学年・学級)の適応力と特性を客観的に把握し、それに対して適切な支援を助言してくれる検査である。学習指導・生徒指導・学級経営のそれぞれに役立つと考えた。

検査の結果、明らかになった本校生徒の特長と課題を述べる。

【共通の特長】

- ・生徒が純朴で、学級内での人間関係が協調的にうまくいっているため、大きないじめや仲間はずれがない。
- ・生活上の困難に対して、自分なりに頑張ろうという意識は高い。

【共通の課題】

- ・全体として、学習に対して意欲の乏しい生徒が多い。
- ・各教科の学習のやり方や自主勉強(家庭学習含む)のやり方自体を分かっていない生徒が多い。
- ・家庭や地域の行事参加やボランティア活動の機会がほとんどないため、社会生活上の効力感を味わっていない生徒が多い。
- ・学習面で、間違ったところや分からなかったところをやり直したり、人に聞いたり、辞書などで調べようという意欲が乏しい。また、苦手な勉強を無意識に避ける傾向が見受けられる。
- ・無意識に守ってはいるが、授業中のマナーを意識して守ろうという気持ちは弱い。

フィードバックとしては、生徒には各担任が「個人表」を教育相談や個人懇談の時に手渡してこれからの適応のためのアドバイスをを行った。また、教員は、担任が各クラスの一覧表を学年会に持ち寄り、個々の生徒に対してこれからの支援のための話し合いを行い、共通理解を図った。

【経年比較】

《平成23年度3年生》

自ら進んで学ぼうとする意欲や競争心は伸びてきている。しかし、頑張ろうという気持ちに反してなかなか効果が上がらないと感じている生徒や伸ばすための方法が分からないということで不安を感じている生徒が少なからずいる。

《平成23年度2年生》

残念ながら昨年度よりさらに自ら進んで学ぶ意欲や競争心が低下している。全国的な数値も低下しているため中だるみの時期の2年生にそういう傾向がある。1年生で伸び悩んだことから、学習への興味も低下しており、学習方法もわからないという傾向がある。

(6) 小中連携の取り組み

従来から、中1ギャップ解消など円滑な中学校生活移行のために、クラブ体験や生徒会訪問や休日の小学生親子参観などの取り組みを行ってきている。これからは、生徒指導面だけでなく、学習指導面での連携が重要になることを予想し、平成22年度は「小中連携会議」(校長・教頭・教務主任・生徒指導主事(生活指導))を夏季休業日に持ち、小中合同研修会(不登校・発達障害への支援)や互いの授業参観を行い、また高校とは英語科の教員中心に情報交換や授業交流を行った。平成23年度は1学期に地域の小学校校長との連携会議を実施し、8月に合同研修会と連携会議を実施した。各学校での情報交換だけでなく、一歩踏み込んだ連携になるよう各分野で連携可能な内容の検討を進めている。

また、平成23年度はチャリティーコンサートなど小学校、地域の商店街、小中PTAとも連携した行事の取り組み等、積極的に実施している。

今後、中学校の生活や学習への更なるスムーズな移行のための取り組みも進めていきたい。

(7) 進路学習ノートの取り組み

学習効果を上げている学年の取り組みとして、進路学習ノートを作成することで学ぼうとする意欲を向上させる手立てとしている。今までの自分の学習への取り組みを振り返ることで自己学習力の育成にも結びつけている。

1年次からテスト前学習計画表と各考査の個人成績表と考査終了後の自己チェックシートを貼り付け、ノート形式で振り返ることで自分の弱い部分や課題を明確にし、進路に向けて取り組むべきことを自分で確認できるようにしている。次への目標をしっかりと持たせ、今すべきことを認識させている。

定期考査終了時の自己の振り返りシート

(※すべて進路学習ノートの一部です)

生活と心構え		数学	
1 チェイム着席ができています	A C	1 単項式、多項式の次数、計算①②③	A B C
2 授業の準備がきちんできています	A C	2 式の値を求める④	A B C
3 課題や提出物はきちんとできています	A C	3 等式の変形⑤	A B C
4 授業の内容をしっかり聞いている	A C	4 式による説明⑥	A B C
5 発表や質問ができる	A C	5 連立方程式の解②③	A B C
6 ノートを上手につくっている	A C	6 連立方程式の計算④	A B C
7 習ったことを復習している	A C	7 複雑な連立方程式の計算⑤	A B C
8 テマに向けて計画的に取り組んでいる	A C	8 連立方程式の利用⑥⑦	A B C
国語		理科	
1 未知へ読み取り	A B C	1 静電気と電子①②③	A B C
2 小さな手袋気持内容把握	A B C	2 回路と電流・電圧④⑤⑥	A B C
3 小さな手袋気持読み取り	A B C	3 生物と細胞⑦	A B C
4 ノート・意味調べ	A B C	4 生活とからだの発達⑧	A B C
5 視写・書写	A B C	5 感覚器官・運動器官⑨	A B C
6 同音異義語・同訓異義語	A B C	6 循環⑩	A B C
7 知覚観察・鑑賞・鑑賞文を書こう	A B C	7 消化⑪	A B C
8	A B C	8 進化⑫	A B C
		9 動物の分類⑬⑭	A B C
社会		英語	
1 年代のあらわし方	A B C	1 単語が書ける1,2	A B C
2 縄文と弥生の区別	A B C	2 単語の変化 3	A B C
3 世界の文明	A B C	3 表現4,5,6	A B C
4 日本と東アジアの関係	A B C	4 文の意味 7	A B C
5 史料読み取り問題	A B C	5 文の書き換えB	A B C
6 7 年表から答える問題	A B C	6 中文の読解 9,10	A B C
8 自分自身の歴史の対する興味関心 ワークを提出した。	A C	7 聞き取り B	A B C
おうちのより			
テスト前の取り組み方がまだです。 計画の仕方も上手ではないです。			

期末テストに向けて

3年1組 ()

目標は

9教科とも勉強する。

そのために

朝 6時半 に起きて、その日の確認 をする。

授業では、集中して理解するを

頑張る、休み時間や、放課後は必ず、予習・復習して

次の準備を する。

もちろん、家庭学習では、2 時間くらいを目安に

集中して取り組みます。

とにかく、しっかり準備をしてから試験に臨みます。

テストが終わったら、間違い直しをやりまます。

テスト学習計画&実行表

3年(1)組 氏名()

日付	学習計画 科目 学習内容	学習結果 予定通り○◎	今日の学習時間	先生の チェック
6/23 (木)	理 ワ-ワ	○	2 時間	AMIC
6/24 (金)	数 プリント	○	1.5 時間	AMIC
6/25 (土)	英 プリント	○	1.5 時間	AMIC
6/26 (日)	英 ワ-ワ	○	2 時間	AMIC
6/27 (月)	技 プリント 社 プリント	○	2 時間	AMIC
6/28 (火)	国 プリント 音 教科書 社 教科書	○	3 時間	AMIC
6/29 (水)	英 プリント 数 ワーク、プリント 体 プリント	○	3 時間	AMIC
6/30 (木)	理 教科書、資料集 技 プリント 英 教科書、プリント	○	3 時間	AMIC
反省	計画とおり進んでよかった		合計学習時間 18 時間	

テスト学習計画&実行表

3年(1)組 氏名()

日付	学習計画 科目 学習内容	学習結果 予定通り○◎	今日の学習時間	先生の チェック
6/23 (木)			時間	
6/24 (金)	数 ルートの所中心		約5 時間	AMIC
6/25 (土)	理 力 社 初めから全体的に 英 力の所とか...		11 時間	AMIC
6/26 (日)	国 武士の所		9 時間	AMIC
6/27 (月)	数 ルートの事		5 時間	AMIC
6/28 (火)	社 (歴) <とくに歴史中心 (心)		6 時間	AMIC
6/29 (水)	数 <中心でやった。(計算等) 英 少しだけおさらい 英 プリント→		7 時間	AMIC
6/30 (木)	英 理 <中心で		5 時間	AMIC
反省	1ヶ月頑張ったと 思う...		合計学習時間 48 時間	

III 成果と課題

1 実践研究の成果

例年の、本校の生徒の学習への意識における課題は、次のようにまとめられる。

- (1) 約3割の生徒が、学習面での効力感をほとんど持たず、学習へのあきらめ感を抱いており、その課題に対して具体的な行動を取ることができないでいる。
- (2) 約7割の生徒は、苦手な教科に対しての復習や、テストで間違えたところの復習を避ける傾向がある。
- (3) 通塾率は、ほぼ1・2年で3割弱、3年で5割強である。約4割の生徒が学習塾以外での家庭学習をほとんどしていない。

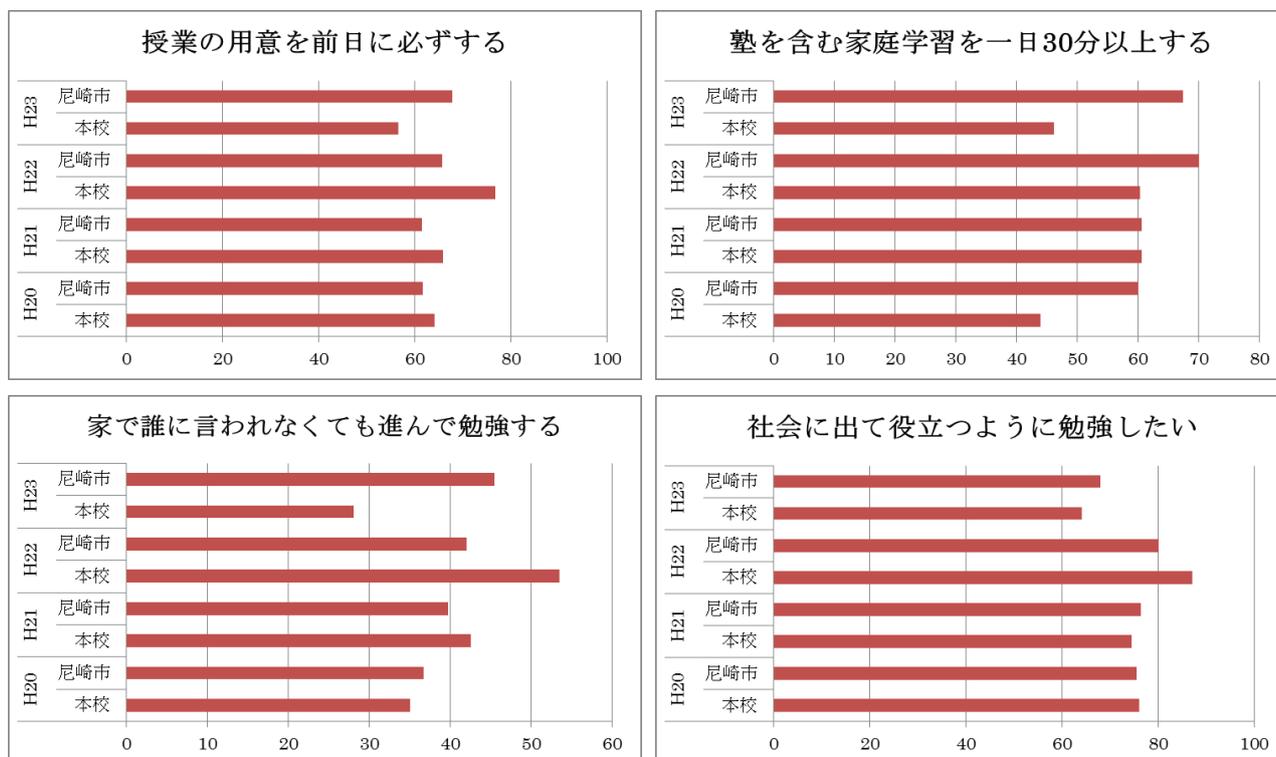
これらの課題が、平成21年度からの取り組みによって、次のような結果となった。

平成22年度までの2年生においては順調に改善が見られた。平成23年度の2年生に関して大幅に数値が落ちているのは、1年次の授業規律の徹底が困難で学習習慣の定着にも大きく影響しているのが原因となっている。今年度になり授業規律も改善が見られるので今後の伸びに期待したい。

【資料1】

実施年度	H20		H21		H22		H23	
	本校	尼崎市	本校	尼崎市	本校	尼崎市	本校	尼崎市
2年生								
授業の用意を前日に必ずする	64.0	61.6	65.9	61.5	76.7	65.7	56.5	67.8
塾を含む家庭学習を一日30分以上する	44.0	60.0	60.6	60.6	60.4	70.0	46.1	67.4
家で誰に言われなくても進んで勉強する	35.0	36.7	42.5	39.7	53.5	42.0	28.1	45.5
社会に出て役立つように勉強したい	76.0	75.4	74.5	76.4	87.0	80.0	64.1	68.0

※ 平成20～23年の5月実施の2年生の尼崎市学力生活実態調査結果より(数字は%)



【資料2】

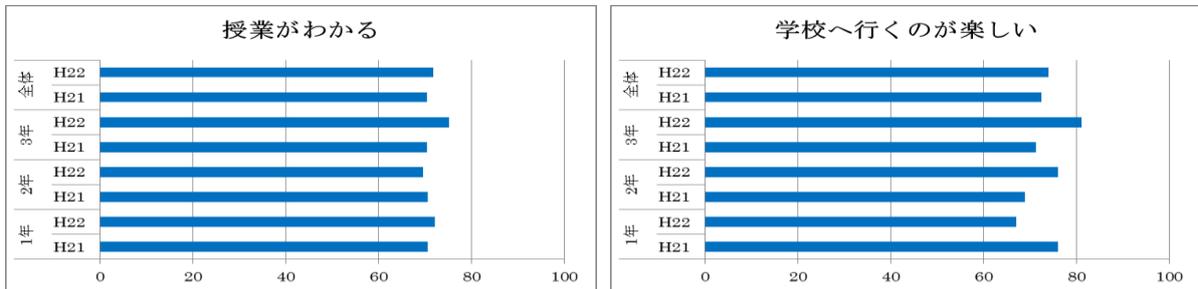
平成21年度生 1年→2年→3年

(数字は%)

実施年度	H21	→	H22	→	H23
宿題は必ずする	67.4	→	72.4	→	73.8
塾を含む家庭学習を一日30分以上する	62.3	→	60.4	→	64.0

【資料3】

学 年	1 年		2 年		3 年		全体	
実施年度	H21	H22	H21	H22	H21	H22	H21	H22
授業がわかる	70.5	72.1	70.5	69.5	70.3	75.1	70.4	71.8
学校へ行くのが楽しい	76.0	67.0	68.8	76.0	71.2	81.0	72.4	74.0



※ 平成21年と平成22年実施の生徒の学校評価アンケート結果より(数字は%)

資料からは、「学習」に対しての「意識」が少しずつではあるが、向上していることがわかる。「授業」そのものへの意識も「家庭学習」への意識も、「義務感」を越えて「自分のために頑張る」という意欲が芽生えつつあるように読み取ることができる。

「義務感」というのは教科担任の指導力によって大幅に変わることがある。しかし、自らわき上がる「学習意欲」はどの授業に対しても、場所が学校であるか家庭であるかにかかわらず、効果的な学習につながるはずである。「単元確認テスト」で少しずつ目標を与え、その都度適切に評価することで、自身の振り返りにもつながる。また、短いテスト範囲なので、テスト勉強の具体的な行動につながり、中位以下の生徒でも「やればできた」という「達成感」につながり、次時の「見通し」を持たせることが容易になる。

そのような効果が出始めていると言える。ただ、残念ながら、現時点では、「授業が分かるようになった」「間違いは必ずやり直す」「授業でやりがいや達成感を感じる」という項目に大きな変化は見られない。

それでも、平成22年6月実施の「自己向上支援検査(SET)」のデータには「自主学习ノート」に積極的に取り組んでいる学年は「学習意欲」が高いというデータが出ている。経年データ【資料2】でも自ら進んで学ぼうとする学習意欲や競争心は着実に伸びてきており、成果が見られる。

【資料4】

平成23年度3年生

項 目	2年生次	3年生次
授業でわからないことを、あとで先生に質問する	18.1	21.5
先生の話をよく聞いている	70.7	75.8
学校には落ち着いて勉強できる雰囲気がある	52.6	59.9
担任の先生は私の気持ちをわかってくれる	53.4	60.8
授業中に間違ったことを言っても笑われない雰囲気がある	41.4	45.6
がんばったことをみとめてくれる雰囲気がある	52.6	60
困っていると助けてくれる雰囲気がある	56.1	67.4
自分勝手な行動や発言を許さない雰囲気がある	19.9	36.8
「いじめ」を許さない雰囲気がある	51.7	65.8

※ 平成22年実施の市内学力生活実態調査アンケート結果より。平成23年度は同じ内容を学校で行う(数字は%)

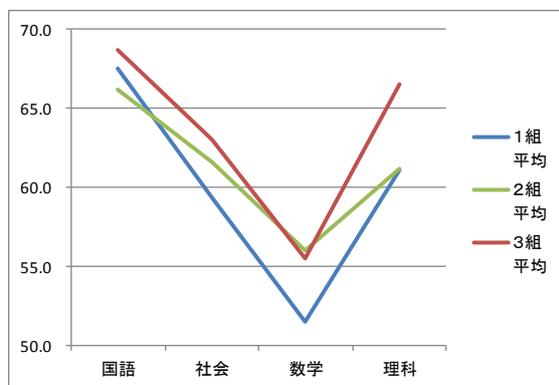
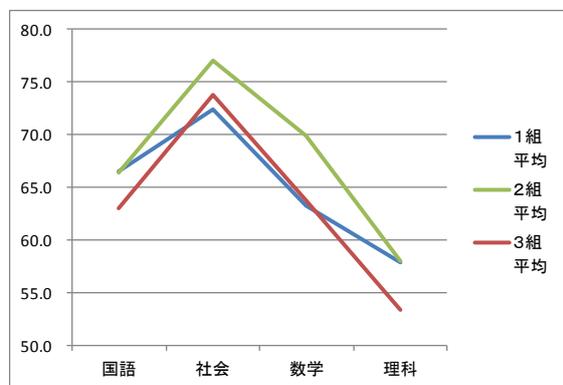
また、3年間の見通しと目標をしっかり定めて取り組み、自治活動を推進して成果を上げている学年は【資料4】からわかるように、クラスの雰囲気が自分を受け入れてくれ、その中で前向きに意欲的に取り組もうという姿勢が育っているのがわかる。さまざまな体験活動を通して、人とのつながりや団結して取り組むことの大切さを知り、心や社会的スキルを伸ばしていくことで意欲・関心・思考・判断といった見えにくい部分を育てることにつながっている。

1学期チャレンジテスト

	国語	社会	数学	理科	英語	5合計
1組平均	66.5	72.4	63.2	57.9		
2組平均	66.4	77.0	69.9	58.0		
3組平均	63.0	73.8	63.8	53.3		

1学期期末テスト

	国語	社会	数学	理科	英語	5合計
1組平均	67.5	59.4	51.5	61.1	64.8	304
2組平均	66.2	61.6	56.0	61.1	69.4	314
3組平均	68.7	63.0	55.5	66.6	71.9	326



平成23年度の1年生では、1学期の間、3組だけが自主学習ノートを実施した。その結果、4月の入学時に行ったチャレンジテストの結果と1学期末の定期考査の結果で自主学習ノートを実施していないクラスとの差が顕著に出ているのがわかった。

現在は、学年全体として自主学習ノートに取り組んでいるが、家庭学習の定着が学力向上に大きく関係していることが改めてよくわかる結果となった。今後の成果がどのように出てくるかが楽しみである。

2 今後の課題

(1) 今後も引き続き効果ある取り組みを実践していくためには一致した指導体制(意識)が重要である。確かに、小規模校で一人の教員が校務分掌を3・4つ持たざるを得ない状況の中で、単元確認テストは遂行できているものの、自己チェックシート・再テストについては実施する時間的余裕が少なく、放課後補充学習も含めて教科担任の自主的实施にとどまっている現状がある。何事も徹底できて初めて効果が生まれるものである。今後の課題は以下の5項目である。

① 「自己チェックシート」の定期的な実施

「自己チェックシート」を平成23年度の要領で、各教科担任が授業以外にも短時間で実施しやすいものに改善し、教科内容だけでなく、学習への意識・態度の振り返りをさせる。

② 「放課後チャレンジスクール」の効果的活用

現在の教育的配慮を必要とする生徒対象の「放課後チャレンジスクール」の実施のメリットを活かし、可能な範囲で希望生徒も参加できるような支援を広げていく取り組みにしていきたい。

③ 「評価規準表」の提示

年度当初に全生徒に「通知表の見方」という評価規準表を配付し、一年間通しての到達目標を示しているが、単元ごとの、あるいは、1時間ごとの到達目標の提示には至っていない。「振り返り」を行うためにはその前提としての「教科の評価規準」が生徒に理解されていなければならない。最終ゴールは示されていても生徒には遠すぎるので、単元ごとや1時間ごとの途中ゴールを示してあげる必要があるかもしれない。そういう「見通し」を持たせるための工夫がどの教科にも必要である。

④ 「目標準拠評価」の研究

「形成的評価」で「評価」と「指導」の一体化を図る、と頭では理解できていても、機械的な観点別の得点計算による評価を出し、それが「結果」として残るだけで「改善のための手立て」として残らなければ「目標準拠評価」のねらいは達成できない。それは生徒の「学習意欲」の向上につながらないということである。「評価」は教員の指導改善のためであり、ひいては生徒の学力(学習意欲)向上のためである。新学習指導要領の「学力観」「評価観」を早急に洗い直す必要がある。

⑤ 学習の手引きの作成

学習のやり方がわからないという生徒が多いことから、単元ごと(あるいは時間ごと)の到達目標の提示と評価規準表をベースとした学習の手引きを新しい指導内容に合わせたもので作成を検討する予定である。よりわかりやすい目安を生徒に示すことで学習の意欲向上と見通しを持った学習方法の推進から学力向上に結びつけていきたい。このことが具体策となり、保護者が「家庭学習」の必要性を感じ、また生徒に支援しやすい形でのシステムとなることを期待したい。

(2) 授業以前の「学級経営」や「生徒指導」の充実の必要性である。「授業のマナー」を呼びかけ、自己向上支援検査で学級の課題を明らかにし、学級担任や学年職員も一体となって各教科担任と連携して指導している。本校は生徒が穏やかで純朴なので「授業崩壊」とまでは行かないが、約3割の生徒は授業について行けないまま意欲も低い。放っておくと、全体の学習意欲に影響していく。やはり、教科担任同士、さらに学級担任、生徒指導担当、特別支援担当と密に連携しながら授業を進めていく必要がある。学習が苦手な生徒が学習に向かう雰囲気は欠かせない。

(3) 新学習指導要領全面実施を念頭に置いて、言語活動を取り入れるなど、習得・活用の両面をはぐくむための授業改善の必要性である。教科書が変わり、学力観を変換せざるを得ない時期に来ている。また、生徒の学習意欲をはぐくむためにも、講義式だけではない参加型の工夫のある授業にする必要がある。確認テストだけでは、授業の中で達成感を味わわせたり、授業への意欲を高めたりすることは難しい。校内での研究・研修はもちろん、プロとしての日常の研究心は欠かせない。

(4) 家庭との連携である。「自主学習ノート」「テスト学習計画実行表」などは保護者には好評である。ただ、だから保護者が全面協力してくださるというわけではない。主導権は学校にあり、従来の「学校評価」としての丁寧な公表はもちろん続けていくが、「家庭学習の手引き」や「評価規準表」など具体的な目標の示唆により保護者の意識を高め、より強力な協力を得られる工夫をしていく必要がある。

(5) 小・中・高の連携である。中1ギャップをなくすためだけの小中連携が「学習内容」の円滑な移行により、学習のつまずきを減らすためのものになってきている。中学校教員は小学校の教科指導を知り、逆に小学校教員は中学校1年の教科指導を知る必要がある。そうしなければ、中1当初の学習のつまずきはその後3年間に大きく響き、一方、中1当初の達成感はその後に少なからず好影響を与える。さらに、進路選択を控える3年次には、ある程度進学後の学びを意識させなければならない。だからといって、知識の詰め込みではなく、思考力や表現力も進学後に通用するように鍛えなければならない。これからは生徒だけでなく、中学校教員が高校の授業を知ることでもある。これらの取り組みが、本当の意味での「学ぶ意欲」をはぐくむことにつながると考える。

おわりに

平成 21 年度より「特色ある教育活動推進事業」を、さらに平成 23 年度には文部科学省による「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究」の指定を受け、学習意欲を引き出す学習システムと家庭学習の定着を目指して、さまざまな手法を取り入れて実践するとともに、若草中学校の生徒への効果を検証し、教職員全員で研究してまいりました。

実践内容として、振り返りと見通しを持たせるための単元確認テスト、自己チェックシート、再テスト・補充学習の実施、家庭学習の強化等の学習活動の基盤作りを行ってきました。その中から今年度は、本校生徒に対してより効果のあったものを重点的に実施しております。この研究が終わったあとも、引き続き本校生徒が学習に対して意欲を持ち、進んで学習に取り組めるような環境作りを学校全体として取り組んでいきます。本日の授業や研究冊子をご覧ください、ご教示いただければ幸いです。

最後になりましたが、兵庫教育大学大学院准教授大野裕己先生をはじめ、本校の研究を進めるにあたり、ご指導していただきました多くの諸先生方、尼崎市教育委員会に深く感謝するとともに厚くお礼を申し上げます。

平成 23 年 11 月 15 日

研究同人

【平成 23 年度】	佐藤喜代子	土高伸也	大北隆志	山添康司	吉元大崇
	岡野明美	池本浩之	國包憲子	田代 司	西山祐子
	友成 智	浦麻木緒	渡 広海	渡嘉敷唯雄	上岡多美子
	善谷篤司	倉田真美	増田英之	田中雅枝	太田美子
	親谷栄一	後藤聡志	三木敏嵩	石井裕恵	倉橋一行
	中西康太	ジェイムズ・ヴァレンシア	近森聡	林 美恵	伊原まつ恵
	原 俊昭	荒屋敏幸	久野豊一	手島光男	
【平成 22 年度】	高木貴久	小林美代子	岩城信隆	久岡泰之	山本礼美
	佃井令子	白木 晋	井上範子	上村恭子	辻本かおり
	木村律子	木村有里	湯澤邦雄		
【平成 21 年度】	田邊 亘	池田好美	遠嶋容子	伊達 譲	下澤寿人
	桑村恭子	門口知里	廣瀬嘉男		

MEMO



平成 23 年度 文部科学省指定
「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究」

平成 21・22・23 年度 尼崎市教育委員会指定
「特色ある教育活動推進事業」 研究発表会

自己学習力の育成を目指す学習システムの工夫
～学意意欲を引き出す学習システムと家庭学習の定着を目指して～

平成 23 年 11 月 15 日 (火)

尼崎市立若草中学校

〒661-0966 兵庫県尼崎市西川 1 丁目 11 番 1 号

TEL 06-6499-9483 FAX 06-6499-9486

<http://www.ama-net.ed.jp/school/j07/>